

秋風千恵さん著『軽度障害の社会学——「異化&統合」をめざして』へのコメント

西倉 実季

1. 本書の知見

- ①インペアメントとディスアビリティは連動しない
 - ②重度障害者を軽度化することができる
 - ③障害が軽い人の方が存在証明に駆り立てられる
- ③は本書全体から読み取れるが、①②をクリアに提示することには成功していないのではないかと→用語選択の問題、イギリス社会モデルに内在する問題

2. 問題設定の妥当性について

■従来の社会モデルにおける重度障害への偏向？

「インペアメントを再度研究の俎上に乗せようという現在の動向があつて初めて、軽度障害者の問題は浮上できるのである」(22)

→軽度障害者の問題が浮上しなかった頃のイギリス社会モデルにおいては、軽度か重度かにかかわらず身体は無視されていたのであるから、重度も同様に無視されていたのではないかと

- オリバーの流れを汲む社会モデルにおいて、身体障害者のディスアビリティ、とりわけ制度的障壁の問題化に偏っていた側面はあるとしても、重度障害者の問題に偏っていたとは言えるのか
- ただし、青い芝の会のラディカルさが注目される土壌がある中でイギリス社会モデルが受容されたという日本の文脈ではそうかもしれない

3. 用語選択・概念整理について

■「障害」という概念

「障害はディスアビリティのみによっても、インペアメントのみによっても把握できない。そこで、両方で把握する試みとして、『障害見取り図』を作成しこれを用いることとする」(29)

→「障害」=インペアメント+ディスアビリティ？

- 著者の言う「障害」とは結局のところ何をさしているのか？
- 社会モデルは確かに「障害=ディスアビリティ」としたが、「社会モデルにインペアメントを組み込むこと」(30)とは「障害=インペアメント+ディスアビリティ」と定義することではないはず

著者自身がUPIASの定義を採用するという断りはないが、

- インペアメント=「手足の一部あるいは全部の欠損、または手足の欠陥や身体の組織または機能の欠陥」(19)
- ディスアビリティ=「現状の社会組織が身体的インペアメントのある人々のことをほとんど考慮しないために、社会活動のメインストリームへの参加から彼らを排除することによって引き起こされる活動の不利益や制約」(19)
◇ 一方で、「社会的な不利」(7)、「社会的障壁」(19)、「生きづらさ」(44)

→「障害＝身体の欠損・欠陥＋不利益」だとするならば、「軽度障害」とは、概念上「軽度な不利益を被っている人々」ということになってしまう

→おそらく、重度／軽度「障害」＝インペアメント（の程度）

しかし、

「ここでいう重度／軽度は、インペアメント自体の重さの比較を意味しない。（・・・）障害見取り図の説明でも明らかなように、同じひとりの障害者が状況により、あるいは関係性によって重度とされたり軽度とされたりすることがままあるからである。障害の重度／軽度は環境や他者の視線のなかで相対的に決められるものであると考えている」（55）

→障害見取り図は、インペアメントとディスアビリティという2つの要素から成るので、やはり重度／軽度「障害」＝インペアメント＋ディスアビリティ

「障害の重さと生きづらさは比例しないことを、ここでは明らかにしてみたい」（60）

→「障害（＝インペアメント＋ディスアビリティ）とディスアビリティは比例しない」？

- 重度／軽度障害という場合の「障害」は、インペアメントとして定義するのが適切ではないか
- そのことと、重度／軽度の相対性を指摘することとは何も矛盾しないはず

■イギリス社会モデルの難点

「ディスアビリティは、UPIS の定義『現状の社会組織が身体的インペアメントのある人々のことをほとんど考慮しないために、社会活動のメインストリームへの参加から彼らを排除することによって引き起こされる活動の不利益や制約』、すなわち社会的障壁である」（30）

「ディスアビリティを構成する要素」としての4つの障壁（32-39）

→不利益・制約それ自体としてのディスアビリティ？ 不利益・制約の原因としてのディスアビリティ？

- 「結果としての不利益・制約」と「原因としての社会的障壁」に同じ用語をあてている
- 原因と結果を区別する必要があるとき問題が生じるのでは？

そうした難点を抱えていないアメリカ社会モデル（川島 2011）

- ①インペアメント（身体の欠損・欠陥）
- ②社会的障壁
- ③ディスアビリティ（不利）

→①と②との相互作用の結果、③が生じるという因果関係を説明する

障害見取り図のところで提示される車椅子ユーザーの例（31）

- ①足が動かない（インペアメント）
- ②交通機関が充実していない（社会的障壁）
- ③思い通りに外出できない（ディスアビリティ）

→インペアメントの程度とインペアメントに対する社会的障壁の程度は必ずしも比例しない。よって、インペアメント程度とディスアビリティの大きさも必ずしも比例しない（どのようなイン

ペアメントかによって直面する社会的障壁は異なっており、よって「別様の生きづらさ」(60)を抱えている)という説明では何かまずいのか?

- 「原因としての社会的障壁」は、重度/軽度の相対性を言うために、またインペアメントをめぐる個人的経験を描くために必要なのでは?
- アメリカ社会モデルの用語法と説明図式を用いれば、「障害=インペアメント+ディスアビリティ」というわかりにくい概念を選択せずに済んだのではないか
- 「原因としての社会的障壁」を強調する社会モデルはもともと、「インペアメントとディスアビリティは連動しない」という知見を得るための道具だったはず

■ 重度/軽度と他の軸との関係

「先行する障害者研究は、その障害が可視的である重度障害者に特化して語られてきた感がある。念頭におかれているのは、障害が可視的であり、機能的に「できない」障害者であり、その障害が重いとみなされる人びとについて、『障害者』と一括りに論じられたり、モデルストーリーとして論じられることが多かった」(7)

→①重度/軽度、②機能制約有/無、③可視的/不可視的という3つの軸はどう交錯するのか?

→「障害見取り図」には①のみが反映されているが、②③はどう関係するのか?

- 第3章の補償努力の事例は、③の軸を導入した方がより適切に説明できるのではないか
- 第4章の手帳の運用をめぐる「うしろめたさ」は、①のみならず②と③が関係しているのではないか

4. 分析枠組みについて

■ 「統合-排除」「同化-異化」

「社会を問うことも障害文化を語ることも共に必要である。平坦だとはとても思えないが、どちらも手離さずどちらかに偏向しない、『異化&統合』の立場を目指し続けることが現在の日本に生きる障害者のとるべき道であろう」(26)

→「異化」とは? 「統合」とは?

石川准の議論を振り返ると、

- 同化-異化は「個人の側の選択」であり、それぞれ「社会の価値観に同化して生きるという生き方」と「自分の個性や自分らしさ、自分たちの文化といったものを生み出すような生き方」。統合-排除は「社会の側の選択」であり、それぞれ「社会の一員として受け入れるという対応」と「拒絶するという対応」(石川 2000: 33)。
- 「構造的統合は、所得格差、職業分布の偏りなどによって測定される社会経済的地位である」。「文化的同化は、当該のエスニック・マイノリティが全体社会の支配的価値観を内面化している程度によって測定される」(石川 1992: 53-54)。

この枠組みの本書への応用を考えたとき、第6章はかなり重要な章であるはず

- ①統合に距離をおく (Kさん、Sさん)
- ②統合を渴望する (Nさん、Mさん)
- ③統合への新しい可能性 (Qさん)

→これらは何がどう違うから区別されているのか、事例からは読み取れなかった
→「統合」とは何なのか？

「統合に距離をおく」(113)

= 「何もできない」という偏見に距離をおく (113) ←→石川の定義

= 「仕事以外の場面で自身の価値を補償しようとする」(116) ≡Nさん

= 三療の仕事に就いていることを「割り切って選んで」いる (114) ≡Mさん

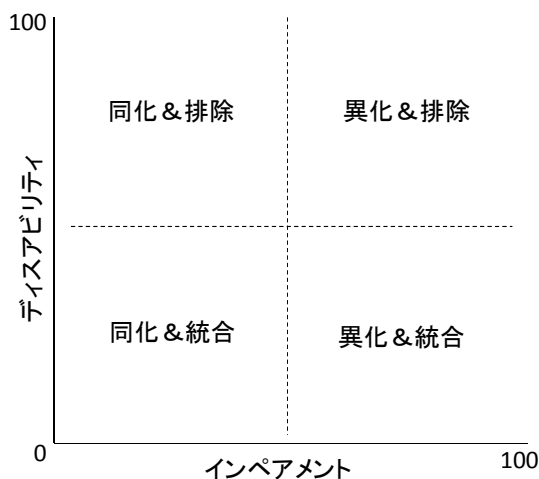
→「統合」という基準では事例を分類できていないのではないかな？

■石川の象限図と著者の障害見取り図との関係

「とくに先陣を切る Q さんや R さんは、未知を開拓する困難をあえて受け入れながら、障害のあるいわば異化された者であるが同等の役割を果たすのだから統合すべきであろうと言うのである」(172)

→「異化&統合」=インペアメントがありながら、ディスアビリティはない状態？

石川の枠組みと著者の枠組みを統合して考えると、こういうこと？



→石川の議論は社会制度上のディスアビリティに限定しており、著者のように主観的なリアリティを含み込んだ「生きづらさ」までは拡大していない

→石川の枠組みと著者の枠組みとの関係は？

■本書の構成について

「この位置にいる人々をなんと名づければよいのだろう。(・・・) 重度でなければ軽度というような単純な図式ではなく、その間を漂っているかのような、重度とも軽度ともつかない人々、グラデーションのなかの人々がいるのではないかと考えられたからである」(105)

→本書は一貫して「グラデーションのなかの人々」を描いているはずだし、見取り図のどこに位置づけるかを意識して調査対象者を選定しているはずでは？

障害見取り図と各章に登場する事例との関係

- 第3章～第5章 インペアメントは低いがディスアビリティは高い事例
- 第6章 インペアメントの高低ははっきりしないがディスアビリティは高い事例
- 第7章 ? (しかもなぜ最後に配置されているのか?)

→障害見取り図の意味がよりはっきりすれば、各章の役割が明確になるのではないか

5. 質的研究として

■分析枠組みとデータとの関係

「社会を問うことも障害文化を語ることも共に必要である。平坦だとはとても思えないが、どちらも手離さずどちらかに偏向しない、『異化&統合』の立場を目指し続けることが現在の日本に生きる障害者のとるべき道であろう」(26)

→結論? その後に提示されるデータはいったい何なのか?

- 引用しているベッカーやベルトーの手法に依拠しているのか

■当事者性について

「筆者は自身、軽度障害者であると感じている肢体不自由な障害当事者である。このことが調査対象者に影響を及ぼす可能性はあるであろう。(・・・)筆者としては、語られたことを忠実に再現し、データに基づいて分析していくのみである」(52)

→「忠実に再現」「データに基づいて分析」するからこそ、「当事者が当事者にインタビューした」という文脈は考慮される必要があったのではないか

- そもそも、「調査者が当事者であること」に意味があると思うから書いたのでは? 当事者性がデータ収集・解釈にどう影響しているのか、気になってしまう
- 「Jさんたち若い世代の障害者」(157)と「70年代の運動を経験した障害当事者たち」(158)という構図

6. その他

■「異化」という立場について

- 調査対象者が語る生きづらさと同化志向との関係が読み取れる事例がある一方で、同化志向の危険性がそれほど感じ取れない事例もある(Nさん、Mさん)

→異化を目指すべきという結論の妥当性は?

■「無限ループから下りる」(163)

= 補償努力を続けないこと(171)

= 「異化&統合」の立場(26)

→「統合-排除」「同化-異化」が明確ではないことと相まって、具体的にイメージできない

石川の補償努力に関する議論(石川 1992)

- ①所属アイデンティティを補う補償努力
- ②能力アイデンティティを補う補償努力
- ③関係アイデンティティを補う補償努力

とすると

- ①をやめること＝健常者集団に所属しようとしなないこと？
- ②をやめること＝健常者並みにはできないことを受け入れること？
- ③をやめること＝社会の一員であることを求めないこと？ ←→「同等の役割」（172）

■ジェンダーと生きづらさ

- 小山内や安積の事例からもわかるように、「統合」「同化」のイメージや、「障害者は何もできない人」という偏見への反発の仕方はジェンダーによって違うのではないか (cf. 松波 2005)
- なぜ、労働に焦点を絞ったのか（とくに第6章）

→モリスやクロウの社会モデル批判を受けた議論の展開になっているのか？

『健常女性』と異なる『障害女性』としての彼女たちに固有の不利益は、ディスアビリティよりもインペアメントに、公共領域よりも私的領域に関するものだと、彼女たちは直感していた。そこにこそ、フェミニズム障害学がインペアメントや当事者の個人的経験にこだわる理由がある」（杉野 2007: 127）

■評者への批判について

「あざは前述したインペアメントつまり『手足の一部あるいは全部の欠損、または手足の欠陥や身体の組織または機能の欠陥』にはあたらない」（43）

「障害を機能制約の問題に矮小化するかに見える記述は残念である」（46）

インペアメント

- ①機能制約を伴うインペアメント
- ②機能制約を伴わないインペアメント

「ここでの〈障害〉は『機能制約 functional limitation』の意味で用いる」（西倉 2009: 334）

→障害の問題は機能制約の問題である、と言っているわけではない

→障害の問題が機能制約の問題に矮小化されてしまうから、インペアメントの質的な違いを強調していく方が適切なのではないか、ということ

→どのようなインペアメントかによって直面する社会的障壁は異なっており、よって「別様の生きづらさ」（60）を抱えている、と言っていく方が「生きづらさ」の可視化のためには有効なのではないか、ということ

引用文献

- 石川准, 1992, 『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』新評論
- , 2000, 「平等派でもなく差異派でもなく」倉本智明・長瀬修編『障害学を語る』エンパワメント研究所, pp.28-42.
- , 2002, 「ディスアビリティの削減、インペアメントの変換」石川准・倉本智明編『障害学の主張』明石書店, pp.17-46.
- 川島聡, 2011, 「差別禁止法における障害の定義—なぜ社会モデルに基づくべきか」松井彰彦ほか編『障害を問い直す』東洋経済新報社, pp.289-320.
- 松波めぐみ, 2005, 「戦略、あるいは呪縛としてのロマンチックラブ・イデオロギー—障害女性とセクシュアリティの『間』に何があるのか」倉本智明編『セクシュアリティの障害学』pp.40-92.
- 西倉実季, 2009, 『顔にあざのある女性たち—「問題経験の語り」の社会学』生活書院
- 杉野昭博, 2007, 『障害学—理論形成と射程』東京大学出版会